

【漁況】

[マアジ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のマアジの漁獲量は、1965年の53万トン进行ピークに減少傾向となり、1980年には5万4千トンとなりました。

その後増加傾向に転じ、1996年には33万トンに増加し、1998年までは30万トン台で推移しましたが、その後再び減少傾向に転じ、2021年は9万トンとなりました。

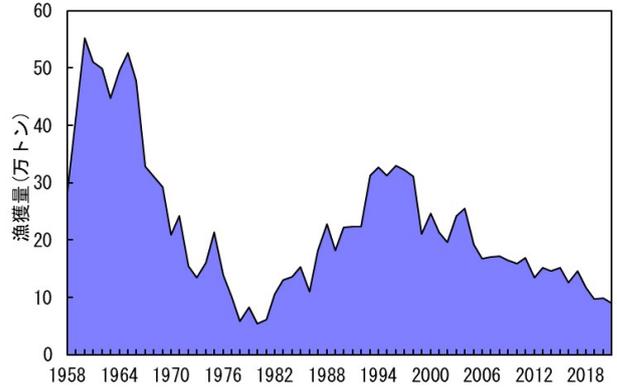


図 全国のマアジ漁獲量の推移

2. 県内の2023年1～3月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、3月に縄瀬、甑東でマアジ仔、豆（1歳魚：2022年生まれ）主体の漁場が形成されました。

薩南海域では、1月に志布志沖、立目沖でマアジ豆（1歳魚：2022年生まれ）主体の漁場が形成されました。2月に野間池沖でマアジ豆（1歳魚：2022年生まれ）主体の漁場が形成されました。

4港計のまき網では、期全体で490トンの水揚げで、前年の35%及び平年の46%でした。

3. 県内の2023年4～6月期の見とおし

漁獲主体：マアジ豆（1歳魚：2022年生まれ）

来遊量：前年を下回り、平年を上回る

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

前期に引き続き今期もマアジの2022年生まれ主体となることが予測され、直近の東シナ海での漁模様から、好調だった前年を下回るものの、平年を上回ると考えられます。

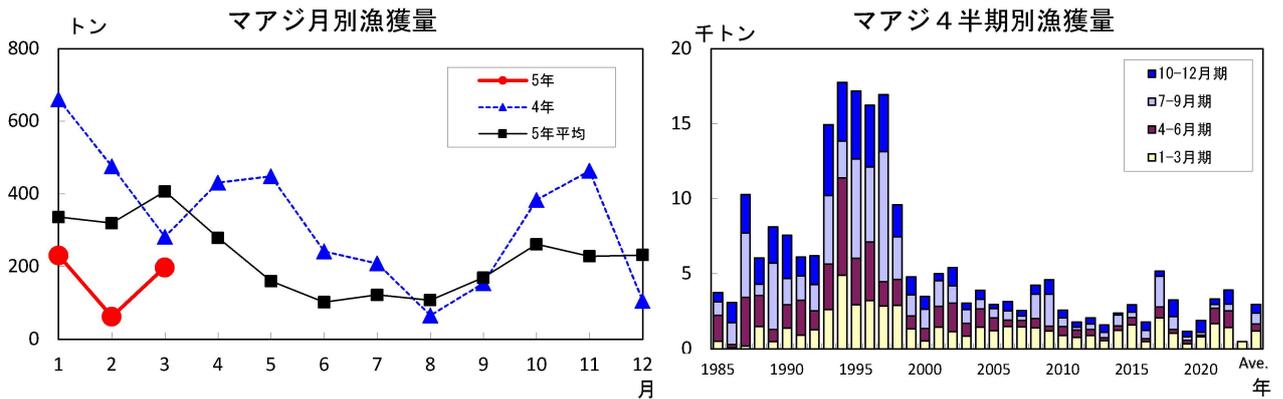


図 マアジまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)、2023年3月22日までの水揚量を使用

[サバ類]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のサバ類の漁獲量は、1978年の160万トン进行ピークに年々減少し、1991年には26万トンとなりました。

1993年から増加に転じ1997年には85万トンとなりましたが、2002年には28万トンまで減少しました。

2006年に65万トンまで増加したあと減少傾向となり、2021年は44万3千トンとなりました。

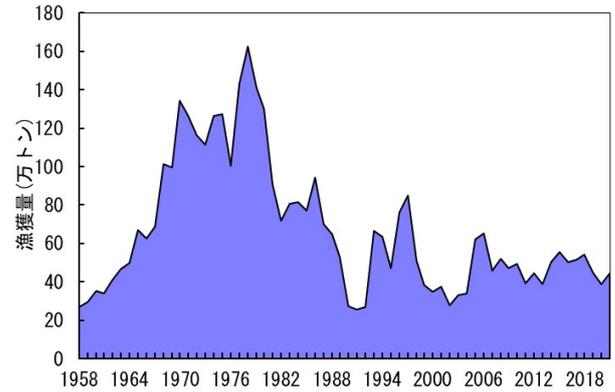


図 全国のサバ類漁獲量の推移 年

2. 県内の2023年1～3月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、3月に縄瀬、甑東でゴマサバ豆、サバ類豆（1歳魚：2022年生まれ）主体の漁場が形成されました。

薩南海域では、1月に馬毛、枕崎沖、志布志沖、立目沖でゴマサバ中、豆、小（1～4歳魚：2019～2022年生まれ）主体の漁場が形成されました。2月に湯瀬、草垣、黒島でゴマサバ中、豆、大（1～5歳魚：2018～2022年生まれ）主体の漁場が形成されました。

4港計のまき網では、期全体で1,607トンの水揚げで、前年の23%及び平年の13%でした。

3. 県内の2023年4～6月期の見とおし

漁獲主体：ゴマサバ豆～大（1～5歳魚：2018～2022年生まれ）

マサバ豆（1歳魚：2022年生まれ）

来遊量：前年・平年を下回る

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

前期の漁獲の状況をふまえるとゴマサバ豆～大とマサバ豆が漁獲の主体となることが予測されます。

また前期は、近年2～4月にまとまった来遊が見られたマサバ太平洋系群の南下群が見られず、漁獲量が前年・平年を大きく下回り低調に推移していることから、今期の漁獲量も引き続き低調に推移すると考えられます。

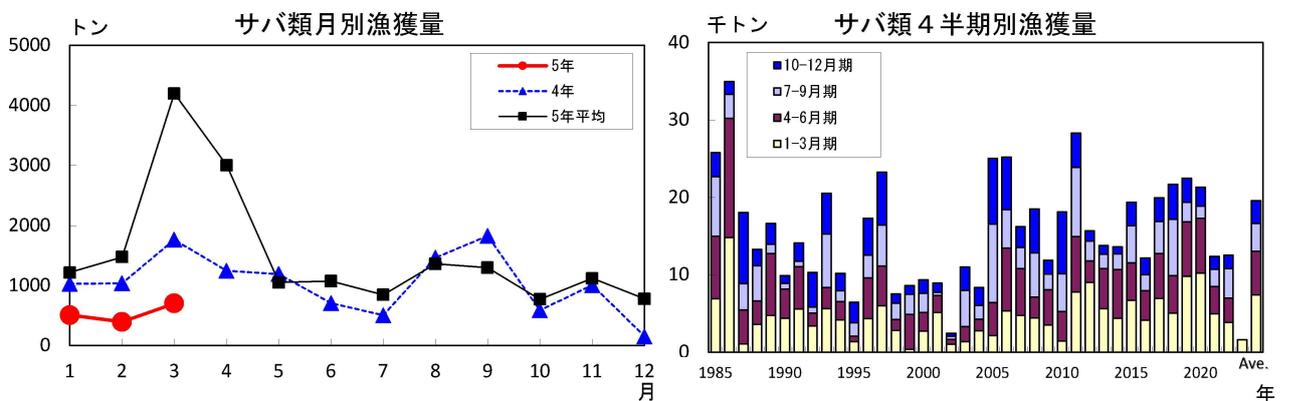


図 サバ類まき網漁獲量変化（4港計）

※平年値は過去5年の平均値(AV)、2023年3月22日までの水揚量を使用

[マイワシ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のマイワシの漁獲量は、1950年代から1960年代にかけての不漁期の後、1973年頃から増加の傾向が見られ、1988年には449万トンまで増加しました。

1989年以降、全国的に漁獲量は減少を続け、2002～10年までは、10万トンを下回る低い水準で推移していましたが、2011年以降は10万トン以上に増加しました。

さらに、2013年以降は20万トンを超える漁獲が続き、2021年には68万2千トンとなりました。

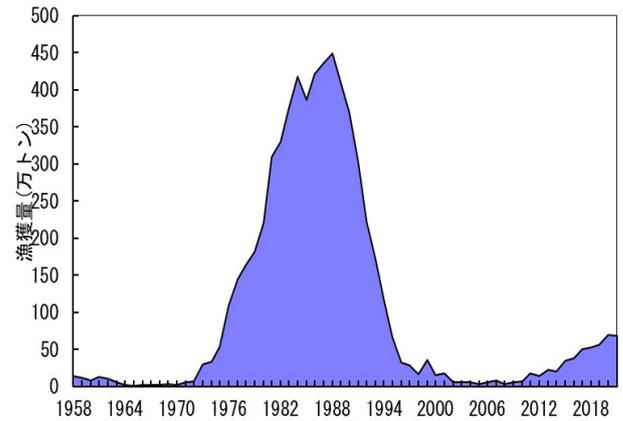


図 全国のマイワシ漁獲量の推移 年

2. 県内の2023年1～3月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域のまき網では、3月に甑東、縄瀬で大規模な漁場が形成されました。

薩南海域のまき網では、3月に野間池沖で漁場が形成されました。

4港計のまき網では、中～大羽（1歳魚：2022年生まれ）主体に1,421トンの水揚げで前年の11,792%、平年の17,992%でした。

北薩海域の棒受網では、0.2トンの水揚げで平年の12%でした（前年同期は水揚げなし）。

3. 県内の2023年4～6月期の見とおし

漁獲主体：4～5月は中～大羽（1歳魚：2022年生まれ）主体で、5月以降は小羽（0歳魚：2023年生まれ）主体

来遊量：前年・平年を上回る

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過から予測しました。

今期前半の漁獲主体となり産卵親魚である中～大羽（1歳魚：2022年生まれ）は好調な漁が続いており、期後半の漁獲主体となる小羽（0歳魚：2023年生まれ）の加入も期待されます。

以上から来遊量は前年・平年を上回ると考えられます。

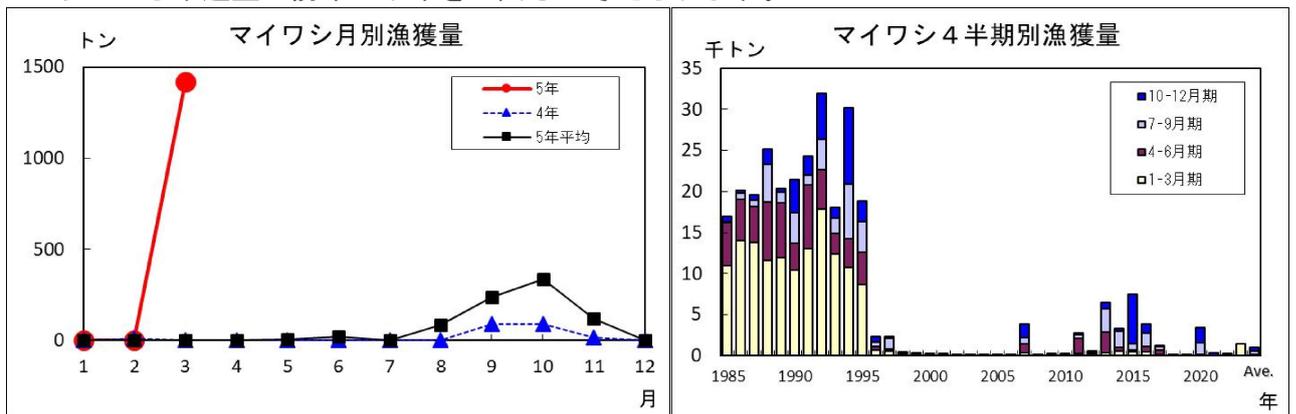


図 マイワシまき網漁獲量変化（4港計）

※平年値は過去5年の平均値(AV)，2023年3月22日までの水揚げ量を使用

[ウルメイワシ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のウルメイワシの漁獲量は、1950年代以降、増減を繰り返しながら増加傾向を示し、1994年に6万8千トンとピークを迎えた後、減少傾向に転じ2000年には2万4千トンまで減少しました。

2003年以降は再度増加傾向に転じ、2016年は9万8千トンで1958年以降では最高の漁獲量となりました。

2021年の漁獲量は2020年よりも3万トン増加し7万3千トンとなりました。

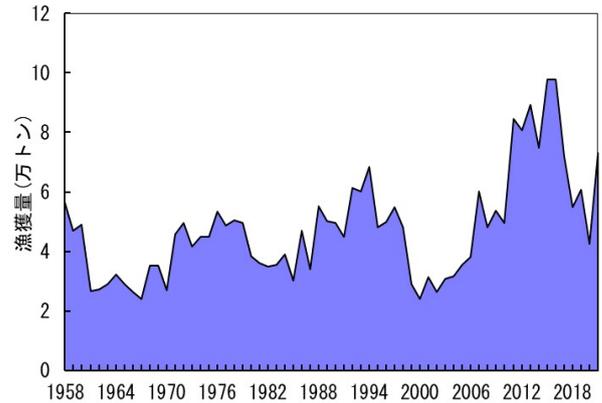


図 全国のウルメイワシ漁獲量の推移

2. 県内の2023年1～3月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域のまき網では、2月に串木野沖、牛深沖、3月に甑東、縄瀬で漁場が形成されました。

薩南海域のまき網では、1月に枕崎沖、2～3月に野間池沖で漁場が形成されました。

4港計のまき網では、中～大羽（1歳魚：2022年生まれ）主体に341トンの水揚げで、前年の35%、平年の62%でした。

北薩海域の棒受網では、5トンの水揚げで、前年の517%、平年の652%でした。

3. 県内の2023年4～6月期の見とおし

漁獲主体：4～5月は中～大羽（1歳魚：2022年生まれ）で、5月以降は小羽（0歳魚：2023年生まれ）

来遊量：前年・平年並み

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

前期の漁況を基に予測すると今期の来遊量は、前年・平年並みと考えられます。

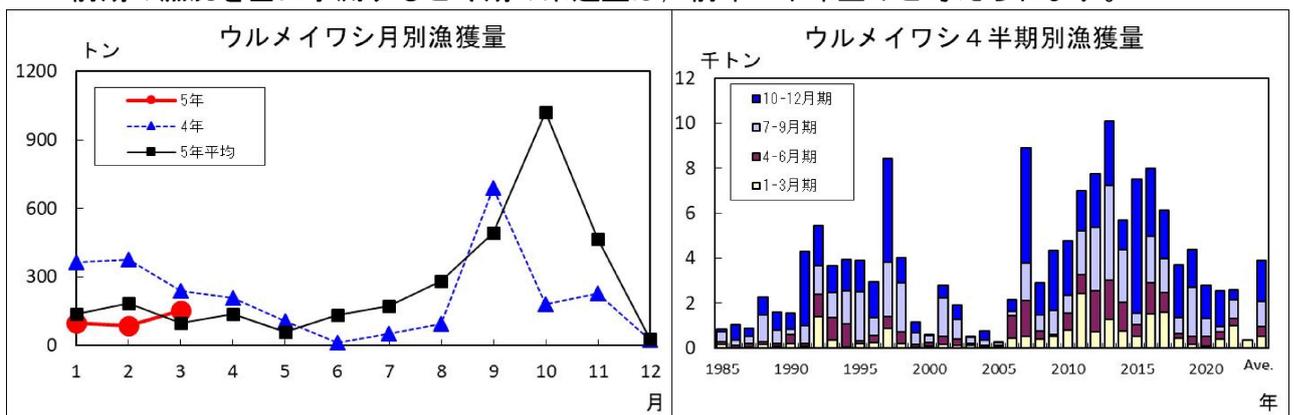


図 ウルメイワシまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)、2023年3月22日までの水揚げ量を使用

[カタクチイワシ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のカタクチイワシの漁獲量は、1973年まで30万トン台で変動していましたが、1974年以降減少傾向となり1979年には13万トンとなりました。

その後は大きく増減を繰り返しながら増加傾向にあり、2003年は過去最高の53万5千トンとなりましたが、その後減少傾向に転じ、2021年は11万9千トンとなりました。

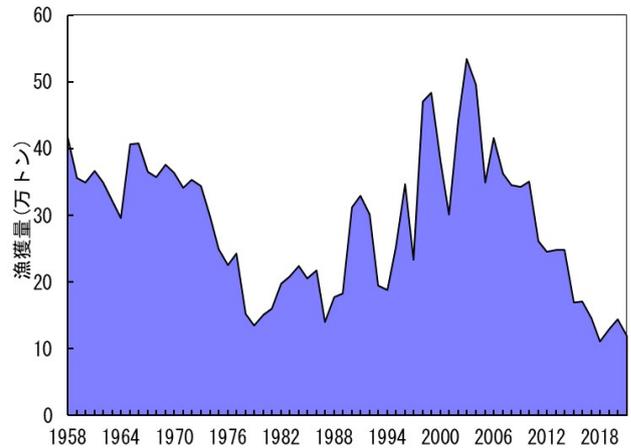


図 全国のカタクチイワシ漁獲量の推移

2. 県内の2023年1～3月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩・薩南海域のまき網では、漁場は形成されました。

4港計のまき網では、期間中水揚げはありませんでした。

北薩海域の棒受網では、小～中羽（1歳魚：2022年生まれ）主体に16トンの水揚げで、前年の35%及び平年の15%でした。

3. 県内の2023年4～6月期の見とおし

漁獲主体：小～中羽（0～1歳魚：2022～2023年生まれ）

来遊量：前年・平年を下回る

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

今期前半に漁獲の主体となる中羽（1歳魚：2022年生まれ）は昨年11月から漁獲が見られず、期後半に漁獲される小羽（0歳魚：2023年生まれ）の加入も見込まれないことから、来遊量は前年・平年を下回ると考えられます。

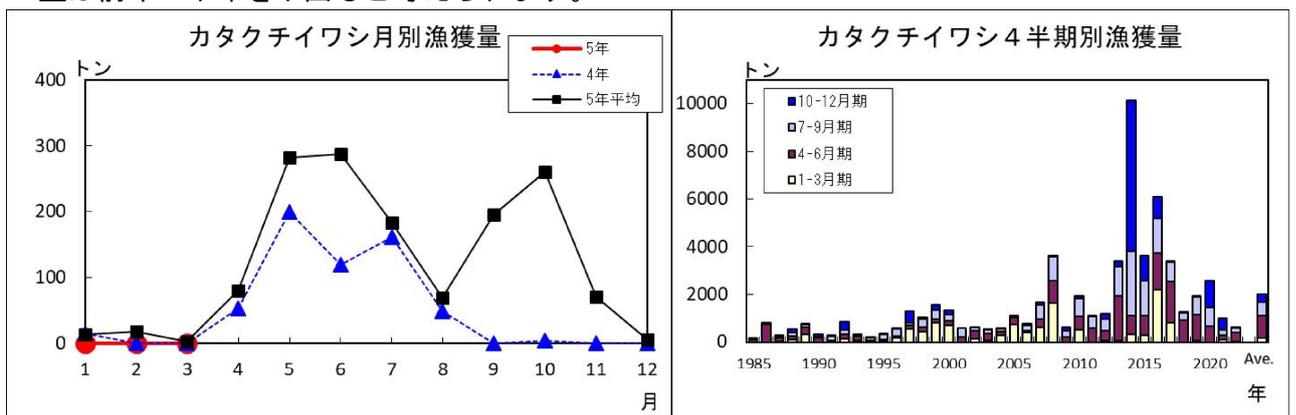


図 カタクチイワシまき網漁獲量変化（4港計）

※平年値は過去5年の平均値(AV)，2023年3月22日までの水揚げ量を使用

[イワシ類参考資料]

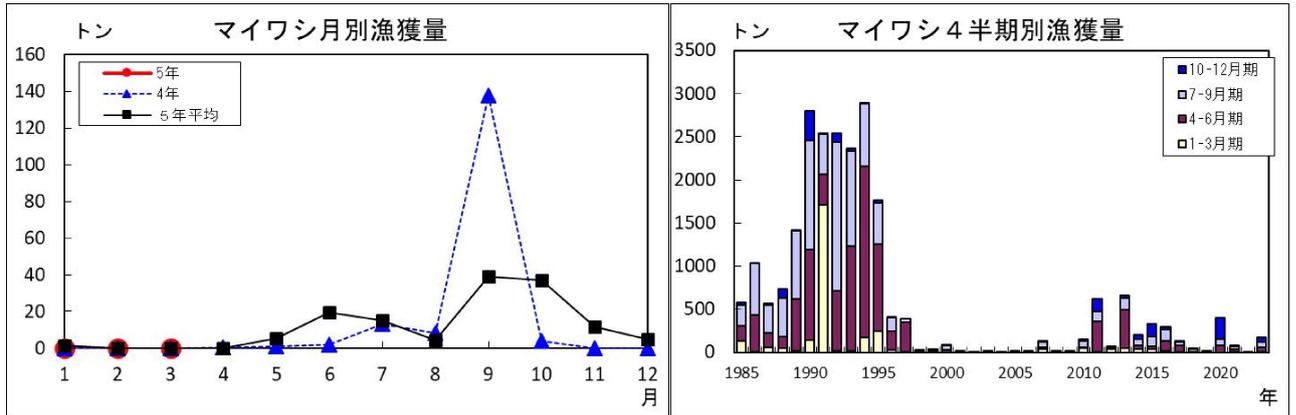


図 マイワシ棒受網漁獲量変化(阿久根港)

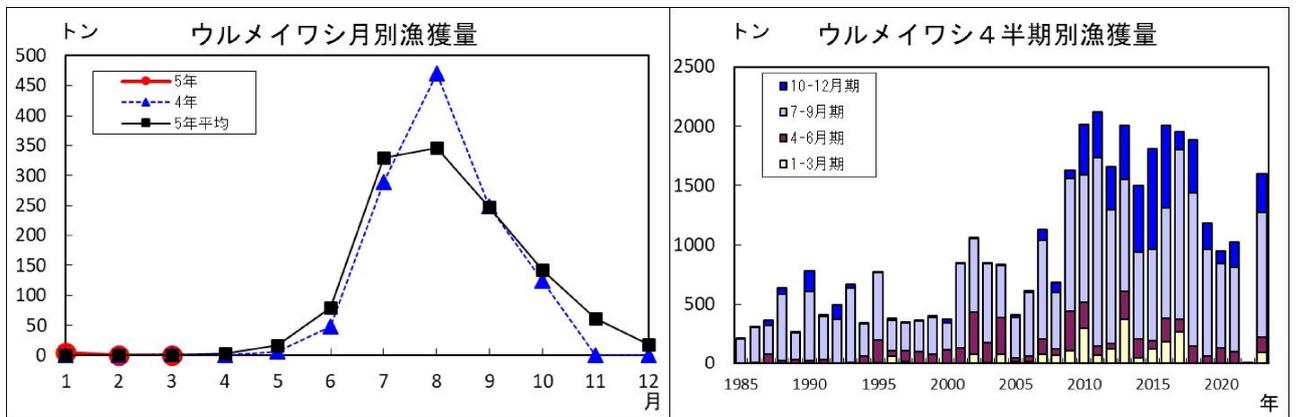


図 ウルメイワシ棒受網漁獲量変化(阿久根港)

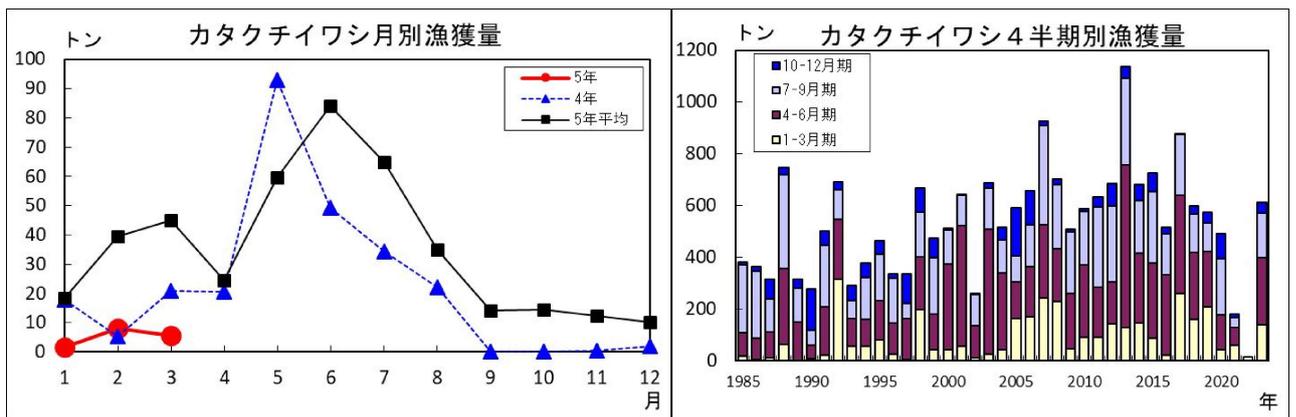


図 カタクチイワシ棒受網漁獲量変化(阿久根港)

※平年値は過去5年の平均値(AV), 2023年3月22日までの水揚量を使用

[ムロアジ類 (参考：漁況経過のみ記載)]

〈クサヤモロ、ムロアジ、モロ (水産技術開発センター調べ：4港計)〉

1. 経年経過

ムロアジ類の漁獲量は、1990年の21,700トン进行ピークに急減し、1994年以降は1,500トンから5,000トンの間での推移しており、2022年は2,708トンとなりました。

2. 2023年1～3月の漁況の経過

4港計のまき網では、屋久島南、島間沖、臥蛇島、種子島南、屋久島北でクサヤモロ中小、中主体の漁場が形成されました。期全体で600トンの水揚げで、前年の106%及び平年の100%でした。

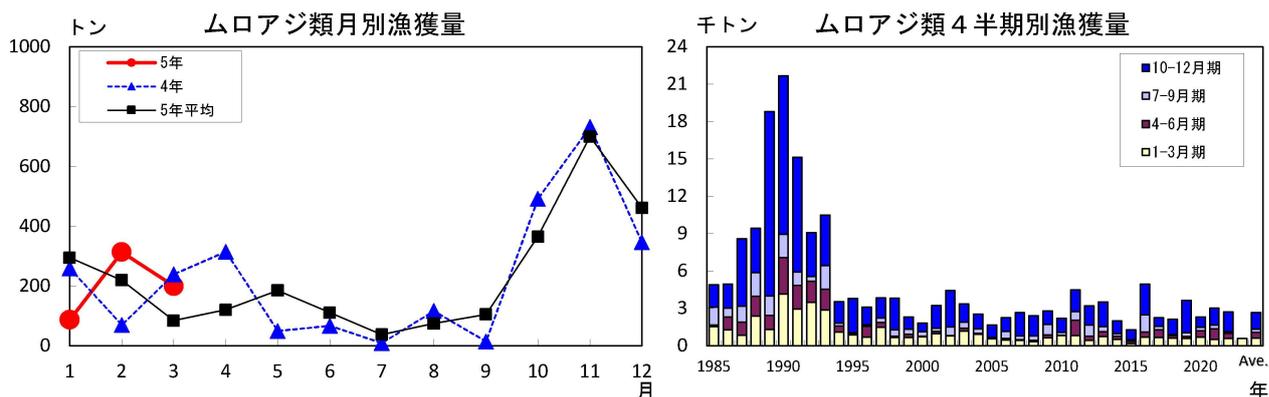


図 ムロアジ類まき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)、2023年3月22日までの水揚量を使用

〈オアカムロ (水産技術開発センター調べ：4港計)〉

1. 経年経過

オアカムロの漁獲量は、1989年の5,300トン进行ピークに一旦減少し、1995年に4,400トンと再度ピークを迎えた後は減少傾向となり、2007年には700トンとなりました。2008年に2,300トンまで増加した後は700～2,400トンの間で推移していたものの、2022年は195トンと減少しました。

2. 2023年1～3月の漁況の経過

4港計のまき網では、屋久島南、屋久新でオアカムロ中～小主体の漁場が形成されました。期全体で157トンの水揚げで、前年の819%及び平年の85%でした。

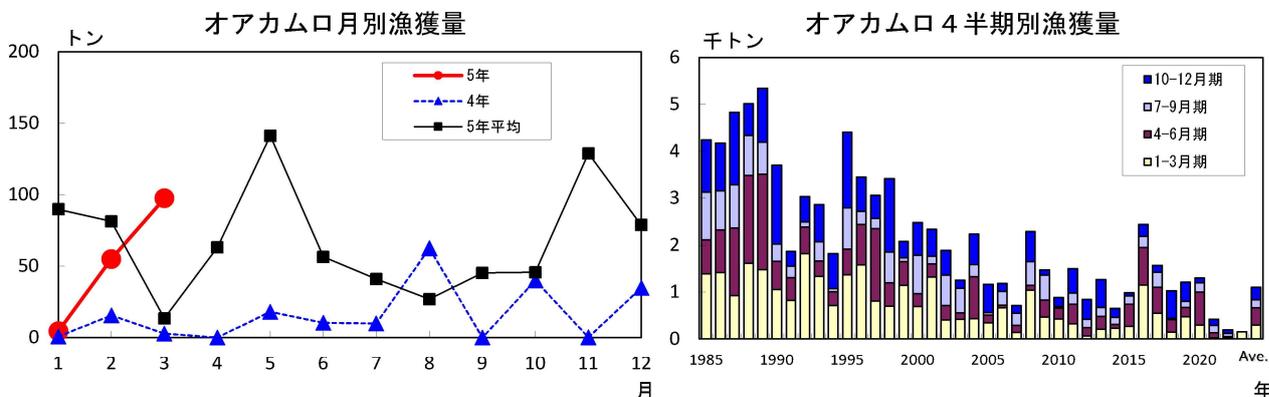


図 オアカムロまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)、2023年3月22日までの水揚量を使用

〈マルアジ（アオアジ）（水産技術開発センター調べ：4港計）〉

1. 経年経過

マルアジの漁獲量は、1987年から1989年に1,500トンを超えるピークがあり、その後低調に推移し、2000年から2003年に再度ピークを迎え2003年には3,150トンと最高を記録しましたが、2004年以降は低調に推移し、2022年は217トンとなりました。

2. 2023年1～3月の漁況の経過

4港計のまき網では、内之浦沖、志布志沖でマルアジ豆、大主体に漁場が形成されました。期全体で61トンの水揚げで、前年の59%及び平年の42%でした。

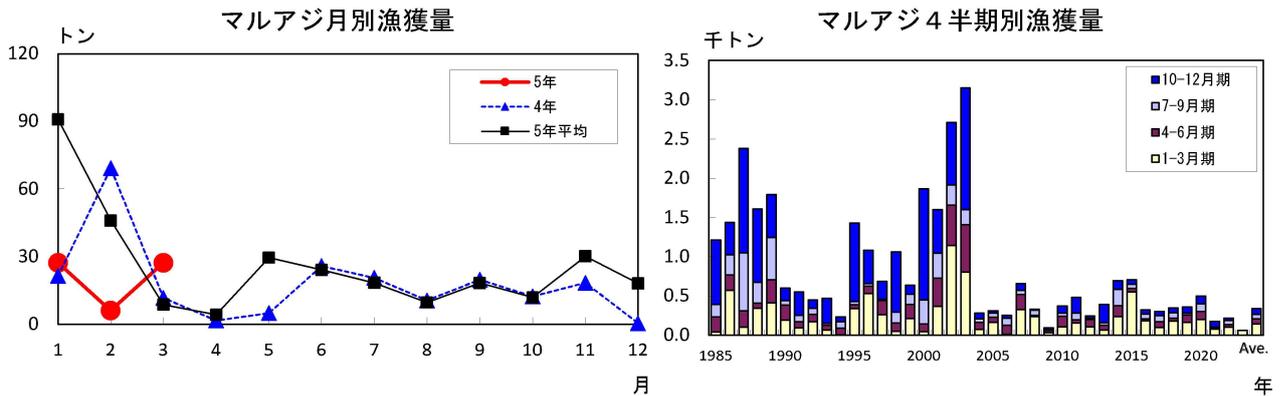


図 マルアジ（アオアジ）まき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)，2023年3月22日までの水揚げ量を使用